

# 『源氏物語』 真木柱巻における「かりのこ」を贈ること

——「柑子橘などやうに紛らはして」——

荻田 みどり

## はじめに

『源氏物語』 真木柱巻は、鬚黒が玉鬘を強引に得たことから始まる。光源氏は養女玉鬘を尚侍として出仕させることに決めていた。玉鬘にあやにくな感情を抱きつつ、世間体を考えた上のことだった。その矢先の出来事に複雑な心境である。

前巻藤袴巻からは唐突とも思われる鬚黒・玉鬘の結婚だが、次代の権勢を握るであろう鬚黒の政治的な面から、「十分な現実性」<sup>①</sup>を孕むとする積極的な評価が為されてきた。また、玉鬘物語を「源氏が玉鬘を手に入れたことになった失敗譚」<sup>②</sup>と捉える論、光源氏の創り出した六条院世界の翳りを読み解く論<sup>③</sup>などがある。さらに、坂本昇氏は、鬚黒と北の方の娘真木柱が明石姫君立后のライバルとなりうる存在であり、「入内資格喪失の事情を玉鬘に絡ませて描く」<sup>④</sup>意図があったとする。

源氏三八歳の三月、源氏は鬚黒邸に引き取られた玉鬘に、かりのこを「柑子橘などやうに紛らはして」贈る。添え文を見た鬚黒は、返事を書きかねている玉鬘に代わり返歌を贈る。普段風流めいたところのない鬚黒にしては珍しい返歌に源氏は苦笑し、心中玉鬘が自分の手の届かぬところに行ってしまったことを切なく思う。

この場面について、斎藤曉子氏や竹下円氏は、源氏が鬚黒に敗北を認め、源氏と玉鬘との断絶を決定的なものにする場面と捉えている。かり

のこが贈られたことについては、熊谷義隆氏が「雁の子」<sup>⑤</sup>「仮の子」を際立たせるための道具立て<sup>⑥</sup>との見解を示し、前述の坂本氏の論を引いて、鬚黒は玉鬘を得たことで立后できる存在であった真木柱を失うことになり、源氏は玉鬘を失ったものの政治的には「決して敗北していない」とする。

しかし、かりのこは源氏が玉鬘に贈ったものである。源氏は万一人に見られても問題ないよう恋情を入念に押し隠して文を書いているが、鬚黒が代筆するとは予期していなかったはずである。「親らしい立場を強調して贈る源氏が「仮の子」を匂わせる必要はない。「仮の子」を指摘したのは鬚黒であって、源氏の歌には「かひ（卵）」が見えるだけである。本稿ではかりのこが源氏から玉鬘に贈られたことに焦点を当て、なぜ玉鬘物語終結のこの場面で、「柑子橘などやうに紛らはして」かりのこを贈ったのかについて考察したい。

## 一、山吹を見て、かりのこを贈る

まず、かりのこを贈る直前の場面<sup>⑦</sup>から、それに連なる<sup>⑧</sup>への流れについて検討したい。

⑦ 三月になりて、六条殿の御前の藤山吹のおもしろき夕映えを見た

まふにつけても、まづ見るかひありてゐたまへりし御さまのみ思し出でらるれば、春の御前をうち棄てて、こなたに渡りて御覧す。呉竹の籬に、わざとなう咲きかかりたるにほひ、いとおもしろし。「色に衣を」などのたまひて、

源氏「思はずに」井手のなか道へだつともいはでぞ恋ふる山吹の花顔に見えつつ」などのたまふも、聞く人なし。かくさすがにもて離れたることは、このたびぞ思しける。げにあやしき御心のすさびなりや。

③ かりのこのいと多かるを御覧じて、柑子橘などやうに紛らはして、わざとならず奉れたまふ。御文は、あまり人もぞ目立つるなと思して、すくよかに、

源氏 おぼつかなき月日も重なりぬるを、思はずなる御もてなしなりと恨みきこゆるも、御心ひとつにのみはあるまじう聞きはべれば、ことなるついでならでは、対面の難からんを、口惜しう思ひたまふる。

など、親めき書きたまひて、

「同じ巢にかへりしかひの見えぬかないかなる人か手ににぎるらん

などかさしもなど、心やましうなん」

(真木柱卷(3)三八五頁)

三月、源氏は六条院春の町で藤や山吹の夕映えを見る。それにより「見るかひ」があつた玉鬘を懐旧し、かつて玉鬘が暮らした夏の町西の対へ赴く。呉竹の籬に山吹が咲きかかる様子を興趣深く感じ独詠する。玉鬘への断ちがたい想いに語り手は「げにあやしき御心のすさびなりや」と評し、かりのこを贈る流れへと移る。

この①山吹を見て独詠→③かりのこを贈る流れには、源氏の気持ちの

必然性があるといえる。言葉の上でも①「わざとなう」→③「わざとならず」、④「思はずに」→⑤「思はずなる」という対応が見える。つまり、源氏は山吹により玉鬘の「もて離れたること」を実感し、それでも募る恋しさからかりのこを贈ったといえる。

山吹は、六条院の主、源氏との関係における玉鬘を象徴する花であつた。⑥玉鬘巻の衣配りでは、玉鬘に「山吹の花の細長」が調進され、野分巻では、夕霧が源氏と寄り添う玉鬘を山吹に喩えている。これらは、夕顔と頭中将の娘であることを連想させる「撫子」とは異なる意識下にある。「夕映え」「呉竹」は玉鬘と亡き母夕顔に共通して見られ、母子関係をつなぐ機能が指摘される。⑦「呉竹の籬に、わざとなう咲きかかりたる」山吹は、夕顔の面影を包含しながらも独自の美しさを見せる玉鬘を、源氏に恋しく思わせるのである。

この情景が源氏の独詠の契機となる。端を発する「色に衣を」、和歌に続く「顔に見えつつ」はどちらも『古今和歌六帖』歌で、「おもふともこふともいはじくちなしのいろにころもをそめてこそきめ」(第五「くちなし」三五〇八)、「夕されば野べに鳴くてふかほどりのかほにみえつつわすられなくに」(第六「かほどり」四四八八)が引歌とされる。山吹の黄色から、染料となるくちなしの色を連想させ、口に出せない玉鬘への想いの色を衣にでも染めて表したい、そのような源氏の心が独詠へとつながる。「顔に見えつつ」には「夕」「顔」が詠み込まれ、玉鬘の面影を忘れがたく思う気持ちに夕顔への想いも含まれている。

二月にも源氏は玉鬘と歌を交わしていた。玉鬘が鬚黒郎に引き取られた翌月である。源氏は鬚黒の手前ちよつとした冗談の手紙では贈りづらい状況にあつた。それゆえ、春雨の所在なさにかこつけて文を贈る。「恋し」の語がこの場面に集中し、源氏・玉鬘双方に見られるように、離れた場所でも共感可能な雨は心のつながりをより強く求める。しかも、玉

鬘との雨の日の語らいは、四月の雨の名残（胡蝶巻(3)一七六頁）、五月の長雨（蜩巻(3)二〇二頁）、野分（野分巻(3)二六九頁）<sup>⑩</sup>があつたが、「のどけきころの春雨」（真木柱(3)三八二頁）はない。二人の雨の思い出が追加されるだけで、二人の仲を引き裂くものでない。

それに対し、三月には玉鬘を想起させる山吹の情景が整う。これが玉鬘本人の不在を痛感させる。源氏の和歌を聞く人もいない。係助詞「ぞ」が「このたび」を強調しているように、同じ情景を分かち合えない状況に至つてようやく、源氏は玉鬘の「もて離れたる」ことを実感する。この後玉鬘が山吹に喩えられることはない。その実感のもとでも動く「あやしき御心のすさび」が玉鬘に文を贈る口実を求め、かりのこを見つけてるのである。

## 二、かりのこを贈る

かりのことは、「鴨の卵」「雁の卵」、総称として水鳥の卵などの諸説がある。<sup>⑪</sup>『枕草子』は「あてなるもの」「うつくしきもの」として挙げている。『うつほ物語』藤原の君巻では、あて宮の求婚者の一人である実忠が「めづらしく出で来たるかりのこ」（七一頁）をあて宮に贈っている。『うつほ物語』には他に鶯と鶴の卵が見られる。鶯の卵は、実忠に北の方が贈ったものである。あて宮にうつつを抜かし家庭を顧みない実忠を非難するため、春雨に濡れる鶯の卵を、涙に濡れる実忠の子の喩えとして用いている。鶴の卵は三日夜の露顕（結婚）や産養など、祝宴での和歌に見られ実物ではない。したがって、かりのこは高貴な相手に献じるの<sup>⑫</sup>にふさわしいものだといえる。

また、『蜻蛉日記』では、作者道綱母から夫兼家の妹怱子へかりのこが贈られている。真木柱巻と同じく三月のことである。

『源氏物語』真木柱巻における「かりのこ」を贈ること

三月つごもりがたに、かりのこの見ゆるを、これ十づつ重ねるわざをいかでせむとて、手まさぐりに生絹の糸を長く結びて、ひとつ結びてはゆひ、結びてはゆひして、引き立てたれば、いとよう重なりたり。なほあるよりはとて、九条殿の女御殿の御方に奉る。卵の花にぞつけたる。なにごともなく、ただ例の御文にて、端に、「この十重なりたるは、かうてもはべりぬべかりけり」とのみ聞こえたる御返り、

<sup>怱子</sup>数知らず思ふ心にくらぶれば十重ぬるものとやは見る

とあれば、御返り、

<sup>道綱母</sup>思ふほど知らではかひやあらざらむかへすがへすも数をこそ見め

それより、五の宮になむ、奉れたまふと聞く。

（上巻 康保四年三月 一五一頁）

かりのこ（または鳥の卵）を十ずつ重ねることは、『伊勢物語』第五〇段の、恨み言を言ってきた女を恨んで男が詠んだ歌「鳥の子を十づつ十はかさぬとも思はぬひとを思ふものは」（二五六頁）や『古今和歌六帖』において「女をはなれてよめる」を詞書に、下の句「人のこころをいかがたのまん」とする歌群のうちの一首「かりのこをとをづつとをはかさぬとも」（第四「さふの思」二一九七）に見られる。『蜻蛉日記』の新全集頭注によると、道綱母はこれらを下敷きに、かりのこを十重ねるという非常に困難なことも生絹の糸でつなげれば可能になるように、「あなたは思ってくださいなくても、わたしはあなたを思っているということをおもしろく述べた一種の遊戯的表現」とする。後に五の宮（後の円融天皇）に献上されていることからやはり貴重なものであり、本気の恨み言の応酬ではなく言語遊戯の趣が強いことが窺えよう。ただし、篠塚純子氏は「直接の相手は、怱子であることは間違いありませんけれど、道綱母

のひそかな思いは夫兼家に向けられているのではないでしょうか。兼家を直接相手にしない、このようななぐさみごとに、かえって、彼女はその思いの濃さをはばからず表現することができるからです」と述べる。自分をないがしろにする兼家を思い続けることに苦悩する和歌が前場面が続くことから、この場面でも忖子に宛てた和歌の背後に兼家への思いを読み取ることができるだろう。

和歌でも『伊勢物語』『古今和歌六帖』歌を下敷きにして、人の心の頼りがたさを詠んだ用例が見られる。

A

あだ人をたのまんこととかりのこをかさねてみんないづれまされり

みつね

ただみね

とりのこはかさねてしばしありぬとも人をたのまむことのはかなさ

〔忠岑集〕第三卷 一一六・一一七、〔躬恒集〕第七卷 二五三・二五四

B

かりのこを十たてまつり給へれば、北方  
かりのこにうらみをさへぞかさねつるいとどつらさのかずをみすれば

〔朝光集〕八五

C

かりのこを人のおこせたるに  
いくつづついくつかさねてたのまましかりのこのよの人のこころを

〔和泉式部集〕七〇六、〔続千載和歌集〕卷第七 雑体にも所収

Aは「いづれまされり」と問う忠岑に躬恒が返歌する問答歌群中の一首で、浮気な相手を頼りにすることとかりのこを重ねることの不安定さを比べている。Bは朝光が贈ったかりのこに対し、北の方が積み重なった恨みを述べ、Cではかりのこの贈り主に、「仮の此の世」との掛詞で人の心の頼みがたさを嘆く。累卵は中国の故事では危険な状態の喩えだが、和歌ではつれない人への思いを積み重ねた不安定さを、累卵の不安定さになぞらえている。

ただし、先に見たB・Cともにかりのこの贈り主の歌は記されていない。Bは私家集であるにもかかわらず北の方の歌のみで、この歌に対する朝光の返歌も収載していない。そこで次に贈り主の歌を挙げた。

D

かりのこをたてまつるとて  
をさなくておやとなれたるかりのこをみやだてしてもおもふべきかな

〔忠見集〕一五六

E

このかたしたるわりごを、さいすすけちかかりてかへすとて、かりのこをいれて

いせじまによさのうみよりとびかよふうはの空にもかひになしけり

かへし

とびかよふよさのしまをぞ人はとりとどめばかひはあらまし

〔和泉式部集〕五一五・五一六

F

ものまうすにつれなくのみみゆる女に、とりのこをいつつやるとて  
すにすめる身をわびつともとりのこのいつかひありとものをおもはむ

〔能宣集〕四卷 二八七

Dはどのような場面で献上したのか分からないが、かりのこに喩えた子の成長を思う。Eは祭主輔親（大中臣輔親）が借りた破子（食物携帯用の容器）にかりのこを入れて返した時の歌である。歌中の伊勢は輔親の任国、与謝は和泉式部の夫保昌の任地丹後国の地名である。「かひ」に「卵」と「効（甲斐）」を掛ける。Fでは求愛しても冷たくあしらう女に鳥の卵を五つ贈る。かりのこではないが、『伊勢物語』同様複数の鳥の卵を贈る例である。ただし、和歌はそれを踏まえて女を非難することはない。Eと同様「五つの卵」―「いつ甲斐あり」の掛詞である。

このように、かりのこに添えて贈る歌には、累卵の不安定さと比較し相手に恨み言を述べるような傾向は見られない。寧ろ、親が生んだ卵であることに重きを置いたり、「卵」―「効（甲斐）」の掛詞で自身の想いを

卵自体に喩えたりする。前述の『うつほ物語』でも、実忠がかりのこを贈ったのは、あて宮への想いの比喩であるかりのこが、多くの求婚者の中で目を惹くと考えたからである。貴重なかりのこを贈ることに、受取主への想いが少なからず読み取れるからこそ、受取主は相手の頼み難さを、重ねたかりのこの不安定さになぞらえ、恨み言を返すのであろう。贈り主は、たとえ恨み言を言われかねない状況でも相手との関係を保ちたいと思い、かりのこを贈ったともいえる。

玉鬘との離別を実感しながらも諦めあぐねている源氏にとって、『蜻蛉日記』にも「三月つごもりがた」に描かれるかりのこは、山吹の咲きほこる晩春の風物としてあつらえ向きであった。文には「おぼつかなき月日も重なりぬるを」と記している。かりのこが不安定な心の重なりによそえられてきたことを前提に据えたものであろう。だから、逆接「を」に続けて、玉鬘に逢えない現状が玉鬘の心ひとつによるものではないと擁護する。かりのこを贈ってはいても、『伊勢物語』などのような、恋人への恨み言ではないとの弁明でもある。飽くまでも「すくよかに」、「親め」いた立場を堅持する。文中で「恨みきこゆる」「聞きはべれば」「思ひたまふる」と、謙譲語・丁寧語を多用し、かしこまった態度を取っていることからその態度が窺える。和歌でも累卵の不安定さには触れない。「おなじ巢」に孵ったはずの卵が見当たらないと、親の立場からの歌として言葉を選んでいいる。物語の構成としては鬚黒の代筆歌に「仮の子」を詠み込ませるためであったとしても、源氏は山吹の風景を見て、甲斐のないことを理解しながらも抑えがたい想いの文を詠み込むためにかりのこを贈ったといえる。

### 三、柑子橘などやうに紛らはして

では、なぜこのかりのこを「柑子橘などやうに紛らはして」贈る必要があったのだろうか。玉上琢彌氏は「そのまま玉鬘に贈ったのでは、礼を失するのであろう、紙に包んだりして柑子橘に見せたのである。」と述べる。しかし、かりのこそのものに飾り付けをして贈る例は見られない。

また、『源氏物語』中の「紛らはす」の用例を見ると、自分の真意やよくない部分を他から分らないようにすることに眼目があり、決して元ものを飾り付けてよく見せることに重点は置かれていない。つまり、「紛らはす」とは本心を隠すことに意義があり、隠した本心が他人に知られることはない。それに対して、当該場面では紛らわした元の姿であるかりのこに寄せて歌が詠まれ、全く紛らわされていない。「柑子橘」は紛らわしたことが記されるだけで、贈答歌や消息の文言に関わっていない。

ここで注目したいのが、源氏の歌に「かひの見えぬかな」とある点である。かりのこが紛らわされていることで、歌の意味が成り立つ。同様の例が蜻蛉巻に見える。薫は匂宮に橘の折枝を付けて郭公の歌を贈る。折枝と歌の組み合わせによって、薫の見た「御前近き橘の香のなつかしきに、郭公の二声ばかり鳴きてわたる」(6二二頁)という情景が表されている。匂宮は薫の意図を察し、返歌に橘と郭公を詠み込んでいる。源氏はかりのこを紛らわして異なる形に見せることで、「かひの見えぬ」状態を表したのではないだろうか。

では、なぜ紛らわした姿が「柑子橘」であったのだろうか。まず、山吹と同色の黄色であることが大きい。源氏の独詠歌の前に口ずさんだ「色に衣を」は前述した『古今和歌六帖』歌であり、衣をくちなしの色(黄色)に染める。「中務集」において、雪をかりのこの形に作って「かりのこもとしとともにやかへるらんゆきをふるすにかひのみゆるは」(第七巻

二三三」と詠まれるように、かりのこは白い。そのかりのこを黄色に染める行為（黄色の染料で染める、もしくは黄色の紙で包む方法が考えられる）は前場面の源氏の気持ちと通じている。

しかし、黄色に染めたかりのこは山吹によつて形容されない。『萬水一露』が「<sup>頼</sup>五月の比の心興あり」と注するように、三月のこの場面で、夏の景物のようになりかりのこを紛らわすことは示唆的である。「柑子橘」のうち、「橘」については、「さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする」（『古今和歌集』巻第三夏歌一三九よみ人しらず、『伊勢物語』第六〇段）に代表される、昔の人を恋うよすがであり、それだけにとどまらず、橘の実<sup>①</sup>は源氏と玉鬘の間でしか分らない胡蝶巻のやり取りを想起させる。

なごやかなるけはひの、ふと昔思し出でらるるにも、忍びがたくて、「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりをりこそあれ。あはれなるわざなりけり。中将の、さらに、昔さまのにほひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もものしたまうけるよ」とて、涙ぐみたまへり。箱の蓋なる御くだものの中に、橘のあるをまさぐりて、

源氏「橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおもほえぬかな世ととももの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思しうとむなよ」とて、御手をとらへたまへれば、女かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたておほゆれど、おほどかなるさまにてもものしたまふ。

玉鬘  
袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ  
(胡蝶巻(3) 一七七頁)

源氏が亡き夕顔を思い出す拠り所として玉鬘に気持ちを傾け、初めて慕情を告白する場面である。これまで源氏を養父としてしか見ていなかった玉鬘は「うたて」と思いながらも穏やかに返歌する。ここで、源氏がくだものの中から橘を取り「まさぐ」る様子が描かれていることに着目したい。この橘の実<sup>①</sup>は、源氏と玉鬘の贈答歌の中で玉鬘によそえられ、源氏は玉鬘の「御手をとらへ」る。この時には源氏の手の中にあつた玉鬘が、「おなじ巢に」歌で示唆するように、今は別の人の手に握られている<sup>②</sup>。そして、「見るかひ」のあつた玉鬘が今は「かひの見えぬ」状態で、源氏には手の届かないところにある。

源氏が玉鬘にあやにくな想いを持つていることは、源氏と玉鬘以外の人には知れない。薄々感づいていたのが右近であり、二月にそのことが描かれている。源氏はもともと夕顔に仕えていた右近を、玉鬘との仲介役として頼りにしながらも、そのために玉鬘への思慕を自由に伝えられなかった。玉鬘の「あやるやく書きなし」（三八三頁）た返事からも、源氏を恋しく思いながら、外見は父娘の体裁を取り繕わなければいけないことが窺われる。だからこそ三月には別の方法を取った。娘を卵に喩え、さも会えないことを寂しく思う親であるかのように見せた文を、かりのこに添える。鬚黒が「すきずきしや」（三八七頁）と非難するように、確かに源氏の文は親からの手紙にしてはあだめいている。しかし、源氏の真意は「かりのこ」とは別のところにある。鬚黒が玉鬘に代わって詠んだ歌「巢がくれて数にもあらぬかりのこをいづ方にかはとりかくすべき」（同）がかりのこに注目していることは、源氏にとっては思う壺ともいえよう。思うがままに伝えられない想いだからこそ、紛らわせた後の姿である橘に、くだもの<sup>③</sup>の中から橘を選び取って告げた想いを隠す。他者には「おなじ巢に」歌で視点をかりのこ自体に向けさせ、玉鬘にしか分らない形で未だ忘れられない玉鬘への慕情を打ち明けたのである。

# おわりに

源氏は玉鬘の比喻として用いられてきた山吹を見て、玉鬘が「もて離れたる」ことを実感する。既に甲斐ないことを知りつつ繋ぎ止めた気持ちのこを贈らせる。三月の風物であるかりのこは貴重で、贈物にふさわしいものであった。また、『伊勢物語』や『古今和歌六帖』では、卵を重ねることが不安定な心の頼み難さと比較される。これを下敷きに、源氏は玉鬘に会えない月日が重なったと述べる。とはいえ、表面は飽くまで「おなじ巢にかへりし」親としての文である。恋人への恨み言になりそうなかりのこも、文の中でその可能性を打ち消し、累卵とは異なる掛詞を用いて「すくよか」な印象を残す。鬘黒がいぶかしむように、養女へ宛てたものにしては過度な執着が見えるものの、親として言い逃れできる範囲の文なのである。

しかし、文も歌もかりのこの修辭に終始し、玉鬘以外の者が読めば、視線がかりのこに向かうよう計算されていた。源氏と玉鬘との間でしか通じない記号「橘」などのようにかりのこを紛らわすことで、源氏がくだものの中から橘の実を選び「まさぐり」、玉鬘に初めて慕情を打ち明けた場面を想起させる。前月に文の仲介を頼んだ右近にさえ、玉鬘への思慕を知られることを懸念し、十分な想いを伝え得なかった。それゆえ、源氏は幾重にも自分の気持ちを覆い隠し、六条院にいた右近を介さず、玉鬘にしか分からない方法を目論んだのであろう。

ただし、玉鬘からの返事はなく鬘黒からの代筆歌が届く。この三月の応酬を最後に、源氏と玉鬘との交渉は描かれなくなる。玉鬘が次に登場するのは若菜上巻の源氏四十の賀で、鬘黒夫人として若菜を献上する。源氏が初めて慕情を打ち明けた際に自身の手の中にあった橘は、皮肉にも二人の関係の完全なる終焉を突き付けるものとなったのである。

『源氏物語』真木柱巻における「かりのこ」を贈ること

\*引用本文は以下の通り。『源氏物語』は『日本古典文学全集』小学館、『うつほ物語』は室城秀之氏『うつほ物語 全』おうふう、『蜻蛉日記』『伊勢物語』は『新編日本古典文学全集』小学館、和歌は『新編国歌大観』により、傍線・記号等私に加筆した。なお、引用本文中の「鴨の卵」「雁の子」はすべて「かりのこ」と平仮名表記に改めた。

## 注

- ① 秋山虔氏「玉鬘をめぐって―源氏物語ノオトより―」(『文学』一八・一二 一九五〇年一二月)
- ② 吉岡曠氏「玉鬘物語の構造」(『源氏物語論』笠間書院 一九七二年十二月、初出は『学習院大学国語国文学会誌』一五 一九七二年一月)
- ③ 田坂憲二氏「玉鬘十帖の結末について―若菜巻への一視点―」(『源氏物語の人物と構想』和泉書院 一九九三年一〇月、初出は『語文研究』四九 一九八〇年六月)、伊井春樹氏「玉鬘十帖の主題」(『源氏物語研究集成』第一巻 風間書房 一九九八年六月)
- ④ 坂本昇氏「明石姫君と真木柱」(『中古文学』三九 一九八七年五月)
- ⑤ 斎藤曉子氏「玉鬘の結婚をめぐって」(『源氏物語の探求』第八輯 一九八三年六月)
- ⑥ 竹下円氏「玉鬘十帖の結末」(『むらさき』四三 二〇〇六年一二月)
- ⑦ 熊谷義隆氏「かりのこ―仮の子を得て実子を手放す物語」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.37 真木柱 二〇〇四年一一月)
- ⑧ 河添房江氏「花の喩の系譜―源氏物語の位相―」(『源氏物語の喩と王権』有精堂出版 一九九二年一一月、初出は『日本の美学』三 一九八四年一〇月)は、「六条院に養女格として迎え取られながら、娘分とも妻妾ともつかぬ玉鬘の、なんとも半端で生きがたい位置の象徴にほかならなかった」と述べる。
- ⑨ 「夕映え」については伊藤夏穂氏(『「源氏物語」の「夕映え」』『日本文学論究』六九 二〇一〇年三月)が、「呉竹」については笹生美貴子氏(『「源氏物語」に見られる「呉竹」―《夕顔・玉鬘母子物語》の伏線機能

―『語文』一二四 二〇〇六年三月)が指摘している。

- ⑩ 野分巻の源氏と玉鬘の応酬の場面自体に「雨」の語はないが、同日夜霧が紫の上を垣間見た場面では村雨が降っていた。また、玉鬘への源氏の返歌に「した露に」とある。

- ⑪ 黒田長禮氏『雁と鴨』修教社書院 一九三九年二月、黒田長久氏・森岡弘之氏監修『世界の動物 分類と飼育(ガンカモ目)』東京動物園協会 一九八〇年一二月によると、マガンやカリガネ等のガン類は冬鳥として日本に渡ってくるものの、日本での繁殖の記録はない(ユーラシアや北アメリカの極北部で六〇八月に一腹四〇七個の卵を産む)。これに対し、カルガモは本邦中部での繁殖期を四月下旬〜七月(太陽暦)とし、一腹六〇一〇個或いは八〇一三個であるという。『蜻蛉日記』のかりのこを贈る場面が三月下旬であること、『古今和歌六帖』等にかりのこを十ずつ重ねる和歌が見られること、また、橋姫巻で宇治八の宮が「うち棄ててつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたちおくれけん」(511四頁)と詠むことなどから考えて、水面または潜水して採食することの多い鴨類であろう。『新撰字鏡』「鴨」項にも「加利」の和訓がある。なお、榊原邦彦氏(「あてなるもの」の段の解釈)『枕草子論考』教育出版センター 一九八四年三月)は平安文学作品に現れるかりのこを全て軽鴨の卵とする。

- ⑫ 『河海抄』は「献鴨子事多在之」と注する。

- ⑬ 篠塚純子氏「かげろふ日記ノート①―あて名のない手紙―」(『形成』二七・六 一九七九年六月)

- ⑭ 源氏の独詠歌中に見られる井手の山吹は『古今和歌六帖』では「山ぶき」項の他「いまはかひなし」項に二首見える。また、藤田加代氏(「山吹」の物語―源氏物語における玉鬘造型について―『日本文学研究』三四 一九九七年三月)が指摘するように、『万葉集』から山吹は実のない花と

して知られており、「実〓種子〓卵がない」というつながりの可能性も見えてくる。

- ⑮ 伊藤和子氏(「源氏物語にあらはれた「給ふる」と「侍り」」『国語国文』二二・一 一九五三年一月)や杉崎一雄氏(「源氏物語の敬語法―特に、いわゆる「謙譲語」「丁寧語」の使用と身分―」『平安時代敬語法の研究―「かしこまりの語法」とその周辺―』有精堂出版 一九八八年一月)は、下二段活用動詞「給ふ」「侍り」が「かしこまりあらたまつた、いわば他人行儀の物言いになる場面」に用いられることを指摘する。

- ⑯ 玉上琢彌氏『源氏物語評釈』第六巻 角川書店 一九六六年六月。『萬水一露』も「開かうしたちはななとやうに鴨のこをつゝみたる也(傍点筆者)」と注する。

- ⑰ 中西智子氏(「真木柱巻の玉鬘と官能性の表現―『源氏物語』における風俗歌および古歌の引用をめぐる―」『国文学研究』一五二 二〇〇七年六月)は源氏に「まさぐ」られていた橘の実が真木柱巻で「かりのこ」に姿を変えたとする。

- ⑱ 『源氏物語』中の「柑子」の用例は真木柱巻を含め四例ある。かりのこを紛らわした姿が橘だけでなく柑子のようにもあることについては、語り手が源氏を評した「あやしき御心のすさび」に通じるような関連性が見えるが、別稿を期したい。

謝辞 中西健治先生には、本論文執筆にあたってだけでなく、研究全般について多くのご教示を賜りました。深く感謝申し上げます。

(本学大学院博士後期課程)